

こだわりの60年 その1

校長として、学校の経営に腐心することはやまやまだが、こだわりをもって生きていこうとするその三つ子の魂は変わることがない。どうにか周囲と連携しバランスを保ってと思いつつ、心の底流に流れるこだわりの部分を刺激されると思わず奔流となって噴出する。ひたすら謙虚にこうべを垂れて人の意見をしっかりと伺い、なんとかかんとか丁寧に調整を図ることはとても大切なことだ。しかし、そんなことを言ってもご理解いただけるか疑問もあるが、ここだけは譲れない部分というのが人には誰でもあるだろう。その部分をつかれると不意に頭が上を向く。どんな敵にも思わずとびかかりそうな勢いで、おもむろに四つに組み始めることをいとわない。結果、傷ついて自分を失って後悔しても、行かない後悔よりはましだと考えてしまう。こうなると厄介な性質である。

中学校の時に、ふざけて押し合いをしている友人たちが、教室のはずれのほうに避難していた自分に寄りかかってきたことがあった。「ふざけるなよ」といって軽く押し返したら、大げさに飛び出していくと、人にぶつかって、ぶつかった人物が廊下の窓を割った。「だから、こんなことになるんだよ」といってはみたものの、一緒にガラスを片付けて、担任のところに行ったところ、「お前たちみんなで直せ」とおっしゃる。「俺は何も悪くない」という言葉を飲み込んで、「わかりました」といい、放課後、ガラス屋に行ってガラスを買った。自転車で30分もかかって、4人がガラス代金を割り勘し、教室に戻り割れた場所の棧を外し、自分たちで直そうとした。

ところがサイズが合わない。少し大きめに買ってきてしまったのだ。約1センチメートルはみ出している。

ガラス屋に戻るの骨が折れる。だから、ガラスを切るカッターを勤務員さんから借りて切ったところ、うまく切れないので、もう一度傷をつけて力を入れると、全体が真っ二つにパリンと割れた。

あとは誰も何も言わなかった。黙ってみんなでうちに帰った。割れたガラスを入れてとりあえず棧をはめ込んだものの、明日は担任に謝る必要がある。

ここをじっと耐えて、もう一度チャレンジしたらどうにかうまくいったのかもしれないが、上手に謝る自信がなかった。もともと、自分が直接割ったものではないのだ。だから、父母に言って何とかしてもらおうとした。それも屈辱だが、そうするしかないと思った。

(以下次号)